

以て千秋に傳ふるに足らざる。又今日の如き時期に際して此の如く艱奥なる哲学系統に潛心するもの甚く少し可しと云ふも余に在ると則宿志の幾分償ふべしを得と至。晩西一醉録

第一般興味全無。平直も異もの有り。本哲学系統全体の構造及び其の各方面各要素の名目等の如きを皆余が一家創設の新意匠に非ざる無しと雖も其の資料の出づる所を溯りて之を言ハ、印度系統も出づるもの有り支那系統も出づるもの有り。猶太系統若く

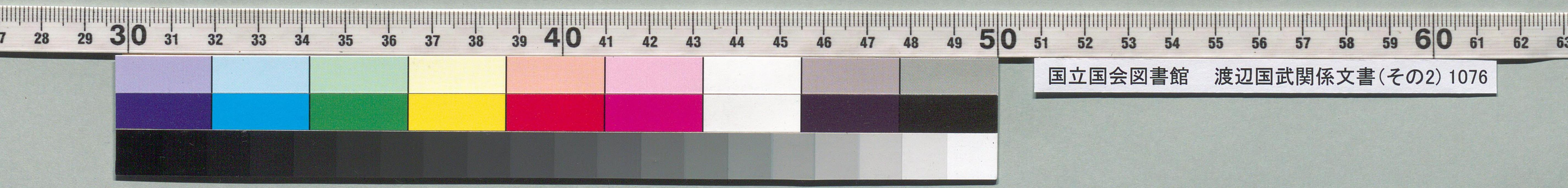
と希臘系統も出づるもの有り。一其の出處を掲ぐるの煩しきと避けて總て之を省略し

此の哲學新系統一家言を蓋余が最初の著書にして又最後の著書ならむ。従前余が名を署して

坊間を傳播せし所の各種の論説の如きを大抵皆他人の筆記編纂若しくは偽造に成るるもの

前者獨逸のシヨペンハウエル氏其のパレルガウント、パラリポノナ(書名)を稿し畢るの日之を

東洋書院



地子擲ち絶叫して曰く今日みして余と余が天
職と果しこまると。

余も亦此の小冊子を稿し終うて後中心欣然
或之氏と其の感と同ふをみるもの有らむとて書
して以て序と爲す。

明治四十二年三月

伊豆山莊に於て

著者

識

東橋山莊